

(別紙2)

審査の結果の要旨

氏名 近藤 洋平

本論文は、イスラームにおける少数宗派であるハワーリジュ派の分派の一つであるイバード派の思想を、共同体論を中心に考察した研究である。

従来のイスラーム思想研究は、多数派であるスンナ派、それから少数派ながらとくにイランに多くの信徒を擁するシーア派を中心として進められてきた。そのため、ハワーリジュ派の思想研究は、少数の先駆的な研究はあるものの、その全貌は解明されたというには程遠い状態である。

著者は、現代におけるイバード派の中心地であるオマーンに数年間滞在したが、その間またその前後の期間を通じて現地の研究者などとの交流を通じて写本を含む同派の資料を多数収集した。著者は、本論文において、それらを広く渉猟して、同派の思想の全体像を描き出すことに成功している。

少数宗派であるイバード派の思想の中心に位置するのが、同派の共同体の成員たる資格を有するか否かを判定する基準をめぐる議論である。著者は、その議論がどのようにして発生し展開したかその過程を歴史的に辿るとともに、その議論の根底をなす同派の人間観や宗教の分類ないし等級付けを、同派の様々な分野の文献に分け入りながら丹念に考察している。さらに著者は、より実践的な問題として、共同体をいかにして維持し、教宣活動を通じて拡大するか、あるいは共同体において信仰を逸脱したり犯罪を犯したりした者をどのように処遇するかという問題にも目を向け、共同体の統治体制の問題にまで踏み込んでいる。

このように、従来体系的な研究がほとんどなされていなかったイバード派の思想を体系的に論じたという点に本論文の学界に対する重要な貢献が認められる。しかし本論文の意義はそれにとどまるものではない。著者は、宗教社会学における共同体をめぐる議論を援用して、イバード派を、宗教的個別主義に基づく排他的性格を有する集団でありながら、同時にイスラーム世界における少数派共同体として生き延びるために実践上は共同体を維持するための機構を発展させたと結論付ける。イバード派に対するかかる評価は、イスラーム研究のみならず広く宗教社会学における共同体論の研究としても重要な意義を有すると思われる。

なるほど、スンナ派思想との比較的な考察や、イバード派の教義の実効性に対する考察が十分に深められていない点や、北アフリカのイバード派の位置付けが曖昧な点などには一層の検討の余地を残すが、このことは本論文の学術的価値を損なうものではない。したがって本審査委員会は、本論文が博士（文学）の学位に値するものと認定する。